日中近代訳語における「日中欧分業型訳語」

李瑶

提要　近代西方来华传教士译词中，有一部分与古代汉语、日本汉字词都有很深的纠葛。本文以“思想”“资料”等 44 个经日回流的传教士译词为考察对象，考察其词义、词结构、词性和使用率的历时变化后，发现难以判断这些词词源的问题所在。为了解决这一词源判断难点，本文提出“中日西合作译词”的概念，旨在客观评价西方来华传教士在完成语词对译上所做出的贡献，同时也重视日语在借入该词后对之注入的新概念以及普及层面的影响。

关键词　来华传教士　日本汉字词　中日西合作译词　词源

1. はじめに

近代[1]中国語（19 世紀末から 20 世紀初めの中国語）の時期には、西洋の新概念を翻訳するために、新たな訳語が大量に作られた。それらの訳語の一部は西洋宣教師[2]が当時の中国の学者と協力しながら古典中国語を基に造語したものである。しかし、そういった語のすべてがそのまま中国語で常用されるようになったわけではない。中には漢訳洋書を通して日本語に入り、幕末明治初期の学者に借用され、新たな意味を与えられてから、或いは日本語の中で普及した後、中国へと逆流入したものもあった。これらの語は、まず中国語において語義、語構造や品詞などの面で古典中国語と異なるものへと変化し、その後、日本語に受容され、さらにもう一度、語義・語構造・品詞または使用頻度の点での変化を生じた。換言すれば、この種の語は古典中国語、西洋宣教師による造語、日本漢字語という三種の要素と関連している。そのため、その語源、或いは近代以降に生じた新しい意味の出処を特定することは容易なことではない。

本稿は、以上のような複雑な背景をもつ西洋宣教師による造語を研究対象として、「思想」「資料」など 44 語を考察した結果を踏まえ、「日中欧分業型訳語」という概念を提案するものである。在中西洋宣教師が西洋の概念・物事を中国語に翻訳した際に工夫をこらしたことを確認すると同時に、日本語がそれらの訳語を借用した後に、さらに新たな意味を与えたことにも注目する。そして現代中国語で使われる意味が生じた時点からそれが普及するに至る過程で、在中西洋宣教師と日本語の双方からの影響を受けたことを主張した上で、西洋宣教師によって作られた訳語の語源判定の問題点について私見を述べたい。

---

[1] 中国語の年代区分については研究者の見解は必ずしも一致をみていない。一般には「上古」「中古」「近代」「現代」という四区分が設定されている。本稿で問題となる「近代」の年代上限と下限については、上限を晩唐五代、下限を清代中期にする立場が有力であるが、蒋紹愚·曹広順（2005）は、近代時期の言語にかかわる言語資料であれば、それよりもやや早い或いは遅い時期も近代中国語の研究範囲に収められるとする。本稿においても、「近代」はアヘン戦争から「五四運動」までの時期を指すこととし、「清末民初」と表現することもある。

[2] 本稿で言う「在中西洋宣教師」は時代によってカトリック宣教師とプロテスタント宣教師に分けられる。それに伴い、明代末期（16 世紀末）から清代の雍正帝による布教禁止（1724 年）の時期にかけて発行されたマッテオ・リッチ（利瑪竇/Matteo Ricci）を代表とするカトリック宣教師と中国人協力者による著書と訳書を前期漢訳洋書という。19 世紀初頭から日清戦争の時期にかけて発行されたモリソン（馬礼遜/Robert Morrison）をはじめとするプロテスタント宣教師たちによる著書と訳書を後期漢訳洋書という。

2. 先行研究

本稿において「日中欧分業型訳語」に分類される語ついては、中国語の近代新語、日本語からの借用語、日本漢字語などの研究者がその語源を判定するとき、異なる結論に至ることが多い。

下表 1 で示されたように、本稿の研究対象である 44 語の状況もそうである。

表 1　語源判定が困難な 44 語

	日本語からの借用語	日本語の影響で普及した語	西洋宣教師の造語	中国古典語	判定が困難であるもの
宇宙	松本（1983）杉本（2005）		黄（2010）	沈（2019）	史（2019）[3]
運動	劉（1984）黄（2010）朱（2020）	高野（1983）	中山（1998）	沈（2019）	史（2019）
気体	劉（1984）蘇（2005）黄（2010）		沈（2019）朱（1993）	朱（2020）	史（2019）
教師	沈（2019）		黄（2010） 佐藤（2007）		
空気	中山（1998）	荒川（2018） 荒川（2020）	黄（2010）沈（2019）	Masini(1997)	
結晶	中山(1998)佐藤(2007)黄(2010) 荒川（2018）朱（2020）		沈（2019）		史（2019）
原則	劉（1984）佐藤（2007）朱（2020）		沈（2019）朱（1993）		史（2019）
細胞	劉(1984)惣郷(1986)中山(1998) 杉本(2005)佐藤(2007)朱(2020)	沈（2012）	黄（2010）沈（2019）		Masini(1997) 史（2019）
西洋			黄（2010）沈（2019）		斎藤（1977） 佐藤（1979）
思想	劉（1984）惣郷（1986）黄（2010） 沈（2019）朱（2020）				史（2019）
視角	沈（2019）				史（2019）
視線	佐藤（2007）沈（2019）		黄（2010）	朱（2020）	史（2019）
視点	沈（2019）朱（2020）				
資料	劉（1984）黄（2010）沈（2019）		朱（1993）朱（2020）		
周辺	佐藤（2007）				史（2019）
重点	劉（1984）沈（2019）朱（2020）		黄（2010）		
重力	惣郷（1986）中山（1998）杉本（2005）	陳（2019）	黄（2010）沈（2019）		
小説	惣郷（1986）	唐（2007） 陳（2019）	黄（2010）沈（2019）		史（2019）
審美	劉(1984)惣郷(1986)朱(1993)		沈（2019）	黄（2010）	史（2019）
新聞		斎藤（1972） 佐藤（2007） 周（2007）	黄（2010）沈（2019）		Masini(1997) 史（2019）
全線					

[3] 史有為（2019）は日本製音読語を「参」というマークを付して日中間の借用関係があることを表し、語源を明記するのではなく、参考となる資料を提供するという形をとることで、語源についての断言を避け、さらなる研究の余地を示すことを意図している。

大学	Masini(1997)沈（2019）		佐藤（2007）		
投票	Masini(1997)朱（2020）		沈（2019）	黄（2010）	
東洋		斎藤（1977） 佐藤（2007）	沈（2019）		
動力	劉（1984）中山(1998)沈（2019）	陳（2019）	黄（2010）史（2019） 朱（2020）		
同意		沈（2019）			
同情	劉（1984）朱（1993）	沈（2019）			
白熱	劉（1984）朱（1993）		沈（2019）		
発電			沈（2019）	黄（2010）	
反映	惣郷（1986）沈（2019）		黄（2010）沈（2008）		史（2019）
反響	劉（1984）惣郷（1986）黄（2010）		朱(1993)沈（2019）		史（2019）
反射	劉（1984）惣郷（1986）		朱(1993)沈（2019）	黄（2010）	史（2019）
必要	劉（1984）		朱（1993）		
表面	沈（2019）		黄（2010）		史（2019）
病院	佐藤（1980）		荒川(2018)沈(2019)		
文学	さねとう（1960）劉（1984） 惣郷（1986）朱（1993）	陳（2021）	黄（2010）	沈（2019）	Masini(1997) 史（2019）
文法	Masini(1997)	鄭（1958）	黄（2010）沈（2019）		
法学	Masini(1997) 沈（2019）			黄（2010） 朱（2020）	
法律	劉（1984）	沈（2019） 李（2018）		Masini(1997) 朱（2020）	
民主	劉（1984）佐藤（2007）	陳（2019）	黄（2010）沈（2019）		Masini(1997)
民族	黄（2010） 沈（2019）			朱（2020）	徐（2007） 史（2019）
理科	Masini(1997)沈（2019）		佐藤(2007)黄(2010)		
理学	惣郷（1986）沈（2019）	陳（2019）	黄（2010）		
恋愛	朱（2020）	柳父（1982） 清地（2016）	広田（1969） 惣郷(1986)沈(2019)	黄（2010）	

なぜこのように異なる結論が出されたのかを明らかにするためには、これらの語の語義、語構成、品詞、文法機能について歴史的な考察を行う必要があると考える。以下においては、そのような考察を行った後、これらの語の語源判定を困難にする要因となる問題点を指摘し、語源の再認識と語源判定の基準について私見を述べる。

3. 研究対象の抽出

まずは『現代漢語詞典』（第 7 版）を『新明解国語詞典』（第 5 版）と対照し、その中から日中同形語を抽出した。その上で、先行研究の成果を整理したうえで、『漢語大詞典』『辞源』『近現代辞源』などの辞書、『中国基本古籍庫』『近代報刊庫』などのデータベース、前期及び後期在中西洋宣教師による漢訳洋書・新聞・英華字典、日本の蘭学[4]と英学

[4] 日本の蘭学の全盛期は『解体新書』（1774 年）の刊行から幕末まで約 90 年間続いた。蘭学書はカトリック宣教師の漢訳洋書にある語と造語法を受け入れると同時に、多くの漢字語を新たに作り出し

資料、日本語の大型辞書と歴史コーパスなどを参照し、日本語の影響を受けた 2647 語を認定した[5]。

次に、この 2647 語について、中国語における意味の変化を下図 1 で示した手順に従って考察した。

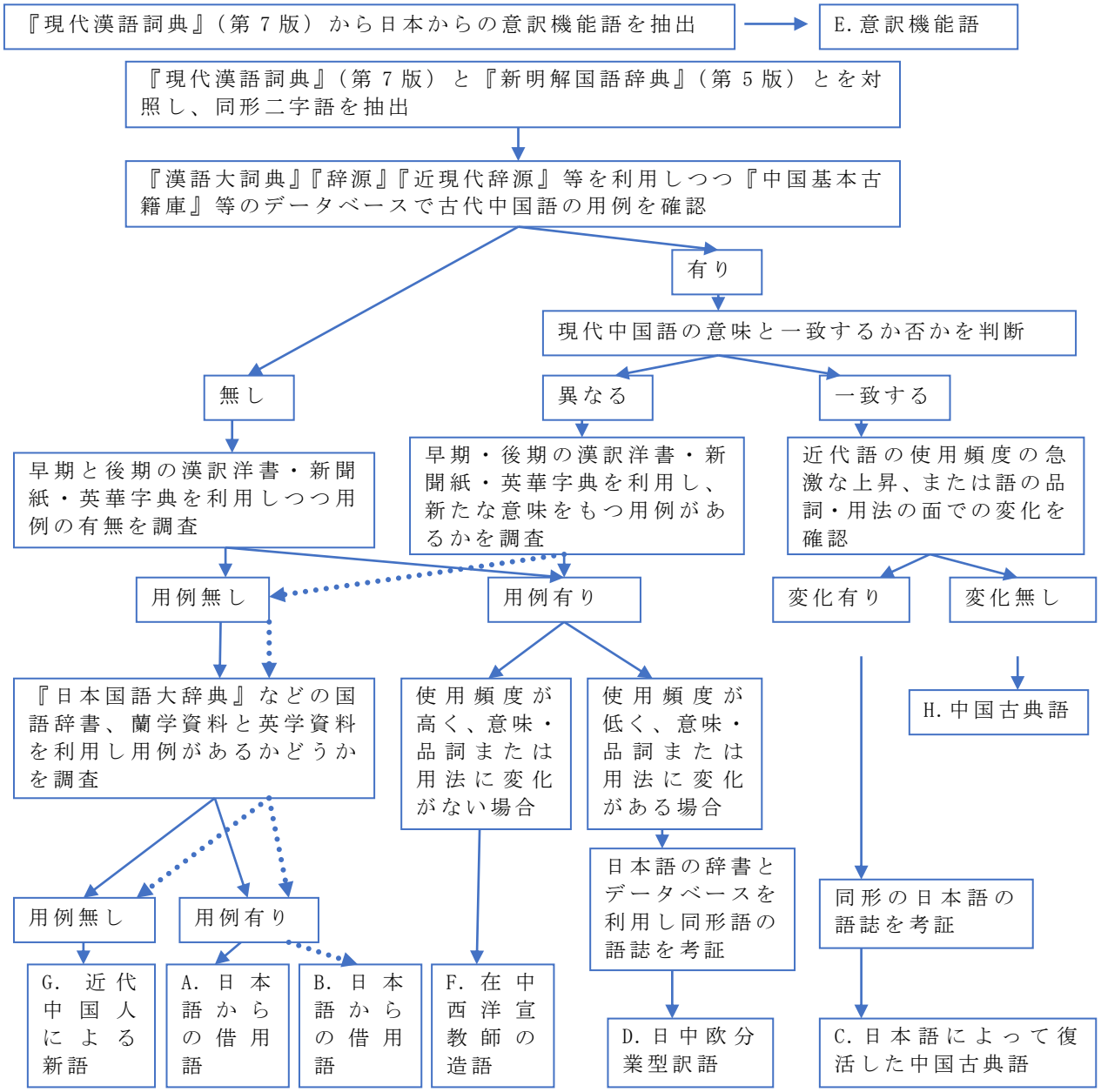


図 1　日本語の影響を受けた 2647 語の抽出方法

た。そして、蘭学者の造語は明治以降の学術用語にそのまま受け継がれたものが相当あることを考えると、明治期の造語を判断する際に、まず蘭学の文献にその語が存在しないことを確認しておかなければならないことになる。

[5] 日本語からの借用語に関する研究資料及び研究対象の確定については、朱京偉（2003：6-18）「日中の語彙交流に関する研究資料」と沈国威（2019：237-240）で示された図が参考になる。

上図 1 では、抽出した語は、日本語との関係から以下の三種類に分けられる。

第一種は、「日本語からの借用語」である。これは日本語から借用された漢字語[6]、語形或いは新しい意味が日本語において生じた語が含まれる。借用された日本語は「A. 日本人が造語した漢字語」と「B.中国古典語の転用語」を含む。

第二種の「日本語の影響で普及した語」は C.日本語によって復活した中国古典語、D.日中欧分業型訳語と E.意訳機能語を含む。

第三種の「日本語の影響を受けていない語」は F.在中西洋宣教師の造語、G.近代中国人による新語と H.中国古典語を含む。

以上を要するに、日本語の影響を受けた 2647 語は、上述の第一種と第二種を含め、下表 2 のように分類される（具体的な語彙の出現頻度も補足した）。

表 2　日本語の影響を受けた 2647 語の分類

項目		語数
I.日本語からの借用語（計 2294 語）	A.日本人が造語した漢字語	1604
	B.中国古典語の転用語	690
II.日本語の影響で普及した語（計 353 語）	C.日本語によって復活した中国古典語	302
	D.日中欧分業型訳語	44
	E.意訳機能語	7
合計		2647

これらのうち、語源判定の困難なものは小項目「D.日中欧分業型訳語」に属している。本稿はこの小項目に属する 44 語を研究対象にし、語義の歴史的変化を調査し、語源判定の基準について私見を述べる。その 44 語は、具体的には「宇宙、運動、気体、教師、空気、結晶、原則、細胞、西洋、思想、視角、視線、視点、資料、周辺、重点、重力、小説、審美、新聞、全線、大学、投票、東洋、動力、同意、同情、白熱、発電、反映、反響、反射、必要、表面、病院、文学、文法、法学、法律、民主、民族、理科、理学、恋愛」である。

4. 意味の歴史的変化の調査

これら 44 語について、意味、語構成、品詞の歴史的変化を考察した。個々の考察結果は、本稿末 7.に「付録：日中欧分業型訳語一覧（44 語）」に示した。その考察の結果を踏まえると、44 語が二種のカテゴリーに分類されることが知られる。以下においては、それぞれのカテゴリーの代表例を紹介する。

4.1　意味変化の影響が顕著な語：「思想」

本稿の考察の対象となる 44 語は、「日中欧分業型訳語」であり、すべて清末民初に日本語からの影響を受けたものである。そのなかの一類は日本語としての意味と一致するために、日本語の強い影響により新たな意味へ変化したと推定されるものである。もう一つの類は、意味変化は発生せず、日本語としての同形語を中国語に借用したことに伴って使用頻度が高くなり、現代中国語のなかで普及したものである。

[6] ここでは、「漢語」「字音語」ではなく、「漢字語」という用語を用いる理由は次のようになる。まず、漢字を音読する語が必ず漢語かどうかと、そうとは限らない。「寿司」などの和語の当て字、「瓦斯」などの洋語の当て字、「旦那」などサンスクリット語の音訳語や「組合」などの普通に漢字で書かれる語も含まれる。本稿は以上のような語の総称として、「漢字語」という用語を用いる。

4.1.1 古代中国語の「思想」

古代中国語における「思想」は動詞であり、語の意味は以下の三つの項目からなる。

① 想念（恋しがる），懐念（懐かしむ）。足下去後，甚相思想（あなたと別れてから、とてもあなたが懐かしい）。応璩『与侍郎曹長思書』〔三国・魏〕

② 相思（思い続ける）。不期阮三在家，思想成病（阮三が家にいてひどく相手を思い続けて病気になるなんて思わなかった）。「書童児因寵攬事 平安児含憤戳舌」『金瓶梅詞話』第三十四回〔明代〕

③ 思忖；考慮（考える）。那婆娘把東西收拾起，思想道：‘我把石家两个丫頭賤勾了，丈夫回来，必然厮鬧。’（その女は荷物を片付けて、「石さんの二人の娘さんを売ってしまったので、旦那が帰ったらきっと私とけんかになる」と考えた）。「両県令競義婚孤女」『醒世恒言』第一巻〔明代〕

以上のような「思想」の品詞と意味は民末まで変わらなかった。しかし、現代中国語の「思想」は名詞であり、＜観念・判断体系＞（例えば、「他的思想有点守旧（彼の思想は少し保守的である）」）または＜イデオロギー＞（例えば、「毛沢東思想」）である。

このような品詞と意味の変化はどのように発生したのだろうか。

4.1.2 清末民初の「思想」

明末以前には、上述の変化は発生していなかったが、清代中期以降の資料を調査すると、清末の新聞に見られる「思想」の品詞と意味は、現在使われているものとほぼ同じであることが知られる。以下の例を見られたい。

（1）専以輸入泰西文明思想為主（西洋文明の思想を導入することを趣旨とする）。「論学術之勢力左右世界」『新民叢報』第一号

例(1)の「思想」は名詞であり、＜イデオロギー＞を表す。

「思想」の品詞と意味の変化は、清末に起こった急な変化であり、他に多くの語が同じ時期に同様の変化を遂げているため、中国語内部における自律的な変化である可能性は低い[7]。清末の在中西洋宣教師によって編纂された辞書と創刊された新聞などの資料も調査を行ったところ、西洋宣教師のメドハースト（1847-48 年）の『英華字典』の中で、「思想」が 17 ヶ所で用いられ、そのうちの一つは英語の名詞 thought の対訳として用いられていた。したがって、中国語の「思想」の品詞の変化、それに伴う意味の変化は最初に西洋宣教師によって引き起こされた可能性が高い。しかし、注意すべきなのは、残りの 16 ヶ所では動詞として使われていることである。対訳された英語の項目は to consider/ to intend/ to reflect/ to speculate/ to study/ to think/ to conceit/ to deem/ to imagine/ to muse/ to ponder などの動詞である。

その後のロプシャイト（1866-69 年）『英華字典』の状況もメドハースト（1847-48 年）の『英華字典』と同様である。ただし、メドハースト（1847-48 年）『英華字典』とは異なり、名詞 thought の訳語は「念頭、意思、想頭、意、心頭、心思、神思、心曲、意態」であり、「思想」ではない。ドゥーリットル（1872 年）『英華萃林韻府』も同様に、thought の訳語に「思想」は用いられていない。また、当時の西洋宣教師によって創刊された新聞の中では、「思想」は古代中国語の品詞と意味を踏襲し、動詞として、＜考える＞という意味を表す。例えば、

（2）再三思想，並無計策（何回考えても仕方がない）。『東西洋考毎月統記伝』1837 年

[7] この問題については、李瑶（2020）を参照。

5 月

以上のことから、清末の西洋宣教師が英語の名詞 thought の対訳として「思想」という語を、古代中国語における「思想」から品詞と意味とを変更して用いたものの、それは一時的に出現しただけで広く使用されることはなかったことが知られる。

4.1.3 中国語に逆流入した日本漢字語「思想」

しかし、この新たな意味は日本語になかで出現・普及したのである。日本の明治時期の多くの漢字語は、西洋宣教師によって翻訳された漢訳洋書または編纂された英華字典から借用されたという事実がある。井上哲次郎等編『哲学字彙』(初版 1881 年, 再版 1884 年, 三版 1912 年) も同じく英華字典の影響を受けた。『哲学字彙』の三種類の版全ての thought の訳語は「思想」となっている。名詞として中国語の中で広く使用されている「思想」は、英華字典を通して日本語に入ってから、日本語の中で普及したのである。

また、明治時期の日本語の「思想」は、＜観念・判断体系＞という意味も表す。例えば、

(3) 此れは是れ貴富人多数の持論なり、旨義なり、何の政治思想（シソウ）か有るや。中江兆民『国会論』〔1888 年〕

まとめると、日本語の「思想」は英語 thought を対訳したほか、新たな意味も生じていた。そして、この意味変化は中国語より早かったのである。上述のように、中国語の「思想」の変化は清末に突然出現したものであり、品詞と語の意味は日本語のものと一致しているため、現在中国語で使われている「思想」は、清末に日本語から借用されたものだと推測できる。ただし、借用された日本漢字語「思想」は、その意味が確定する過程において、西洋宣教師の造語の影響も受けた。また、西洋宣教師が造語した「思想」は古代中国語の動詞「思想」の品詞と意味を変えたものである。

4.2 使用頻度の影響が顕著な語:「資料」

次は、二つ目のカテゴリーである使用頻度の影響がより顕著であった語に属する「資料」を例としてとりあげる。

4.2.1 古代中国語の「資料」

古代中国語における「資料」の用例は見られない。最初の用例は、明代の在中西洋宣教師の漢訳洋書にある。

(4) 先観物、観事、観人、観時勢、而習覓道理以相質, 所謂種種議論之資料是也（まずは物、事、人、時勢を観察し、その中の道理を発見する。いわゆる各種の議論の資料とはこれらのことである)。アレーニ『西學凡』第 530 頁〔明代〕

ところが、筆者が『中国基本古籍庫』で「資料」を検索したところ、明代末期まで、上述の用例しか見つからなかった。明代までの中国語においては「資料」という新しい語がまだ常用されていなかったと推測できよう。

4.2.2 清末民初の「資料」

清末民初の新聞などでは、「資料」という語がよく見られる。

(5) 本論所徵引之資料多出日本獨立評論（本論で引用された資料の多くは日本独立評論から出典する)。「論太平洋海權及中國前途」『新民叢報』第二十六號

筆者は『申報』で「資料」の用例を調査したが、1895 年以前の用例は探し出せなかった。つまり、清末になっても、日本語からの借用が増加した時期以前には、この語は常

用されていなかったのである。

4.2.3 日本漢字語「資料」

日本語の「資料」は明治初期にはすでに広く使用され、＜何かをするための材料。特に、研究や調査などのもとになる材料。もと。＞という意味を表している。

（6）鎌倉時代の諸書中にも智慧を進むるの資料に至りては殆んど之を欠くと雖も。田口卯吉「四・八」『日本開化小史』〔1877～82 年〕

この用例から、「資料」の意味は中国語の「資料」と大きく異なることはないことがわかる。幕末の漢訳洋書の輸入に伴い、そのなかの漢字語が日本語に借用されたことは多くの学者によって考証されている。そして、明治時代に入ると、それらの多くが日常的の用いられるようになった。

それにも関わらず、中国語の「資料」は在中西洋宣教師に造語されたが、当時は普及しなかった。清末民初に入ってから、日本語の「資料」の借用に伴い普及したと考えられる。

5. 語源及び語源判定に関する諸問題

5.1 漢字語における「語源」の問題

一般にある語の語源を判定する場合、その語の語形、すなわち音形と意味との組み合わせに対応する語を、音韻の規則的変化を踏まえつつ、古文献ないし再構成された祖語のなかに見出す方法が採られる。しかし、本稿の研究対象である漢字語の場合、表示される漢字の組み合わせが一致していれば、一般に語形が一致するものとみなされる。漢字の一致は音形の一致を必ずしも意味しないが、漢字語の場合、音声言語のレベルではなく、純粋に書面語のレベルにおいて漢字の字形を媒介に語が伝播することがあり得るからである。よって本稿でも語源を検討する際は、漢字の一致を語形の一致とみなすこととし、漢字の組み合わせが一致したものにつき、意味面での対応を、歴史的・地域的な観点から検討することになる。

5.2 語源認定の問題点

先に挙げた 2 語に加え、他の 42 語を検討すると、古代漢語に由来する近代訳語の語源の判定には困難が伴うことが知られる。主要には、以下の三点に整理される。

第一点は、新出の意味に関する問題である。この類の語は古代中国語でも用いられていたため、最初に西洋の新概念の対訳に用いた人物、或いは最初に出現した文献に出現を基準に語源を認定するならば、容易に問題が生じてしまう。先の 2 語のように、ある語が在中西洋宣教師の著作で新語の対訳に用いられたかのようであっても、実際には近代的な意味での使用ではなく、古代中国語での意味の枠内での使用であり、語の品詞や語構成なども古代中国語のものを継承していることがあり得る。語の「新たな意味」をどのように認定するかという基準は明確ではない。

第二点は、意味変化の連続性に関する問題である。一部の語（「民族」「小説」「新聞」など）は、古代の意味と近代の意味との間に断絶が見出し難い。西洋宣教師が訳語を選択する際、中国人の受容度を考慮したため、しばしば当該の語の新しい意味と古い意味とは密接な連続性を備えており、明確には分離し難い。大凡の意味の出現を基準にすれば、その語を古代中国語に出典のある語とみなすことができる。しかし新たな意味の出現を基準にすれば、西洋宣教師によって西洋の新概念の対訳に用いられた以上、西洋宣教師の造語といってもよい。しかも、これらの語は日本語に借用され、日本語において

意味が変化し、その意味が定着してから中国語に逆流入したために、最終的な意味の定着という観点から、日本語からの借用語と認定する立場もあり得る。このように、意味変化が連続しているために、語源を認定することはいっそう難しくなる。

第三点は、使用頻度と普及に関する問題である。西洋宣教師による造語のうち、一部のものは日本語に借用されてから大きな意味変化を生じなかった。しかし、これらの語は、もともと中国語では常用語ではなかったが、日本語に入ってから普及した後、清末民初にまた中国語に逆流入し、近代中国語において常用の新語となったものである。従って、これらの語は、普及の面で日本語からの影響を認めないわけにはいかない。ただし、使用頻度を具体的にどのようなに統計をとるかという問題が残されている。

5.3　本稿の語源認定の立場

在中西洋宣教師の多くは中国語に精通していたが、翻訳する際には中国人の学者と協力しており、彼らが文章に手を加えることも多かった。このように造語されたものは、西洋宣教師と中国人協力者とが共同して作り出したものだと言える。一部の語はもともと中国人協力者の著作で用いられ、彼らの使用によって普及した。そのため、このような語は外来語ではなく、一般に中国語の近代新語だとみなされている。本稿もこれに異を唱えるものではない。

5.2 で言及した語源認定に関する三つの問題点について、本稿は以下のような立場をとる。

第一点の新出の意味の認定については、朱京偉（1994）が中国語の新しい意味が日本語からきたと認定する基準を以下の三点にまとめている。すなわち、①新出の意味が必ず日本で発生していること、②新出の意味が短時間のうちに発生したものであり、連続した意味変化の結果生じたのではないこと、③新出の意味が古い意味に取って代わっていることである。本稿はこれらの三つの基準に賛成した上で、以下の二点を補足したい。④語の意味が変わらなくとも、意味項目が減少すること、或いはその結果として一つの項目に固定されること、も新しい意味の発生だと見なす。⑤先に述べた「思想」の例のように、多くの語の意味変化は語構成または品詞の変化によって引き起こされているため、新出の意味が発生したかどうかを認定する際、語構成または品詞の変化も考慮しなければならない。

第二点の意味変化の連続性については、次のように考える。最も早くその語を西洋の新たな概念の対訳に用いたのはどの人物か、ということだけから判断することはできない。新しい意味と古い意味の間の連続性を無視することはできず、新しい意味が定着するまでの全過程を考察しなければならない。この変化の過程の中における意味変化を引き起こした要因をすべて考慮すべきである。

第三点の使用頻度と普及について、使用頻度をどのように計量化すべきかということは、次のような点から着手できると考える。まず、古代中国語のデータベースや、漢訳洋書と英華字典などを利用し、その用例数を検索し、近代の日本語を大量に借用した近代時期の資料を集めたデータベースでの検索結果と比較し、その数量の差 が大きければ、当該の西洋宣教師の造語が普及する過程において、日本語が大きく作用したと考えることができる。さらに、語の文法機能から判別する方法も考えられる。つまり、ある西洋宣教師の造語が、同形日本語が借用された後に、その語が用法の上で一定の特殊性をもつようになっており、その特殊性が日本語と一致している場合、その語は西洋宣教師と日本語との双方からの影響を受けたと言える。

6. おわりに

本稿は、上述の検討を踏まえ、「日本語借用語」「西洋宣教師の造語」以外に、日中間において在中西洋宣教師と中国の学者とが相互に影響を与えつつ造語した訳語を、「日中欧分業型訳語」と称し、独立した類として設けるべきだと考える。この類に属する個々の訳語の具体的な変遷過程を跡づける研究は、すでに先行研究により少なからず行われてきたが、総括的な研究は、語彙の変遷が複雑かつ多岐を極めているために十分には行われてはいなかった。本稿の意図は、漢字語の造語から普及までの過程における、西洋宣教師と日本語からの影響を、明確に位置づけるべきことを主張するところにある。

7. 付録 - 日中欧分業型訳語一覧（44 語）

カテゴリー1：意味変化の影響が顕著な語

語彙項目	古代中国語（出現時期・品詞：意味）	宣教師資料（出現時期・品詞：意味）	日本語（出現時期・品詞：意味）	現代中国語（品詞:意味）
1-1 運動	後漢・動詞：①運行し移動する、②動かす、③施行する、④巡り動く	清末・動詞：同左	明治・名詞（スルが付加された場合は動詞）：①時とともに変わって行くこと、②健康の目的で、体を動かすこと、③ある目的を達するためにいろいろな方面に働きかけること、④軍隊が移動すること	［同左］
1-2 空気	明代・名詞性フレーズ：「天」と「地」の中間地帯＝「空」の「気」	清末・名詞：地球の大気の下層部分を構成する無色、透明の気体	①幕末・名詞：地球の大気の下層部分を構成する気体 ②明治・名詞：雰囲気	［同左］
1-3 結晶	無し	清末・動詞性フレーズ：結晶体になる	①幕末・動詞性フレーズ：結晶体になる ②幕末・名詞：結晶体 ③明治・名詞：愛、努力、悲しみなど、抽象的な事柄が積み重なって集まった結果	名詞：[同左②③]
1-4 原則	無し	明代・名詞：原理、要旨	明治・名詞：一般の現象に共通する法則	［同左］
1-5 思想	本稿 4.1 節を参照。			
1-6 視角	無し	明代・名詞：目と対象物の両端を結ぶ二直線のなす角	①幕末・名詞：［同左］ ②昭和・名詞：観点、視点	［同左］
1-7 視線	無し	明代・名詞：眼球の中心点と外界の見られる	明治・名詞：見つめている方向	［同左］

		対象とを結ぶ直線		
1-8 視点	無し	清末・名詞：視線のそそがれるところ	①大正・名詞：[同左] ②昭和・名詞：物を見たり考えたりする立場	[同左]
1-9 周辺	無し	明代・名詞：数学で、円・多角形のような閉じた図形の外形を囲む曲線または折線	幕末・名詞：物のまわり	[同左]
1-10 重点	無し	清末・名詞：てこで重さを受けるところ	大正・名詞：①重心のかかる所、②大切にして注意すべき点	[同左②]
1-11 重力	前漢・名詞性フレーズ:大きな力	清末・名詞：物体の重さ	幕末・名詞：地球の引力	[同左]
1-12 小説	後漢・名詞：ちまたで耳にするような、つまらない話	清末・名詞：novel の概念	明治・名詞：[同左] ただし西洋の文学形態の変遷を踏まえた上で、novel を最も進んだ段階のものとして、romance などの他の文学形態と明確に区別した上で、複数の原語に対応していた「小説」を novel に限定し、近代的な概念を注入したもの	[同左]
1-13 審美	無し	清末・名詞：Aesthetics の訳語。詳しく美しいもの	明治・名詞：Aesthetics の訳語。美を識別すること	[同左]
1-14 新聞	唐代・名詞：近頃聞いたこと、最近の社会の出来事	清末・名詞：①[同左]、②news の訳語	①幕末・名詞：news の訳語 ②明治・名詞：新聞紙のこと	[同左①] なお、清末民初に②の意味でよく使われている
1-15 全線	無し	明代・名詞：数学の線の一種	明治・名詞：①線路の全体、②戦線の全体	[同左]
1-16 投票	無し	清末・動詞：入札する	明治・名詞（スルが付加された場合は動詞）：vote の訳語。選挙または議案を採決するときの方式	[同左]
1-17 動力	前秦・動詞性フレーズ:力を使う	明代・名詞：移動する力	①幕末・名詞：機械などを動かす力 ②明治・名詞：ある行動を起こさせる原因	[同左]
1-18	無し	清末・名詞：物体が高	明治・名詞：①物体が高温に	[同左②]

白熱		温に熱せられると、白色光に近い光を放つこと	熱せられると白色光に近い光を放つこと、②最高潮に達した状態になること	
1-19 発電	無し	清末・動詞性フレーズ：ファックスを送る	明治・名詞（スルが付加された場合は動詞）：電気を発生させること	［同左］
1-20 反映	無し	明代・動詞性フレーズ：逆に映る	明治・名詞（スルが付加された場合は動詞）：光や色が反射して光って見えること	動詞：上部機関に報告する なお、清末民初に同左
1-21 反響	無し	清末・名詞：山びこ、こだま	①幕末・名詞：［同左］ ②明治・名詞：ある出来事が世間に影響を与え、それに応じて出てくる反応や、一般の人々の意見・論議など	［同左②］
1-22 反射	唐代・動詞性フレーズ:振り返って射る	明代・動詞：光・電波・熱・音などが物の表面に当たって、反対の方向に進むこと	①幕末・名詞（スルが付加された場合は動詞）：［同左］ ②明治・名詞（スルが付加された場合は動詞）：医学で、意識とは無関係に一定の刺激に対して、一定の反応を示すこと	［同左］
1-23 必要	前漢・動詞性フレーズ:必ず…しなければならない	①清末・動詞性フレーズ：must、will の訳語、［同左］ ②清末・形容詞/名詞：necessary の訳語。なくてはならない（こと）	明治・形容動詞：なくてはならない	［同左］
1-24 民主	前秦・名詞：①君主、②官吏	清末・名詞： republic 或いは democratic の訳語	明治・名詞:「デモクラシー」の意味。一国の主権が人民にあること	［同左］
1-25 理科	無し	明代・名詞：哲学	幕末・名詞：物理、化学、生物、地学などの科目の総称	［同左］
1-26 理学	宋代・名詞：宋･明儒家の哲学思想	清末・名詞：フィロソフィーの訳語	①幕末・名詞：［同左］ ②明治・名詞：自然科学。特に、明治初期の物理学の名称	［同左②］
1-27 恋愛	宋代・動詞：恋い慕う	清末・動詞：to love の訳語	明治・名詞（スルが付加された場合は動詞）：特定の異性に特別の愛情を感じて恋い慕うこと	［同左②］

カテゴリー2：使用頻度の影響が顕著な語

語彙項目	古代中国語（出現時期：意味）	宣教師資料（出現時期・使用頻度：意味）	日本語（出現時期・使用頻度：意味）	現代中国語（使用頻度：意味）
2-1 宇宙	①前秦：天地 ②前漢：軒下と棟梁 ③明代：時代	清末・低：天文学的には、すべての天体を含む空間	幕末・高：Universeの訳語、すべての天体を含む空間	高：[同左]
2-2 気体	①前秦：精力と体 ②南北朝：気の実体 ③宋代:文章のスタイル ④明代:人の気質と見た目	①清末・低：ガス体 ②清末・不明：同左	幕末・高：ガス体	高：[同左]
2-3 教師	①晋代:宗教上の指導者（仏教用語） ②元代：歌、劇、武術などの術を教える人	①清末・高：宗教上の指導者 ②清末・低：学校などで、学業を教える人	明治・高：学校などで、学業を教える人	高：[同左]
2-4 細胞	無し	清末・低：生物体を構成する基本単位	明治・高：①生物体を構成する基本単位、②ものごとを構成する要素の一つ一つ	高：[同左]
2-5 資料	本稿 4.2 節を参照。			
2-6 西洋	宋代:南海西方海中及び沿海の各地	明代・低：インド洋沿岸地域全体。或いはアフリカ、ヨーロッパ、アメリカの三州	幕末・高：日本や中国などから欧米の国々をさす総称	高：[同左]
2-7 大学	前漢：太学のこと。	明代・低：西洋の学校の対訳。最高等の学校	明治・高：学術の研究および教育の最高機関	高：[同左]
2-8 東洋	元代:中国東方の海中	明代・低：ハワイ付近の海中を「大東洋」、日本の東方海中を「小東洋」と称する	幕末・高：日本・朝鮮・中国・インド・インドネシアなどの総称	高：[同左]
2-9 同意	①前秦:思いや心を同じくすること ②後漢:意味が同じであること	清末・低：agree の訳語	明治・高：他人の行為に賛成ないし肯定の意思表示をすること	高：[同左]
2-10 同情	①前秦：同一の性質 ②三国:思いや心を同じくすること	清末・低：sympathy の訳語	明治・高：他人の気持や境遇、特に悲哀や不幸を、その身になって	高：[同左]

	③前漢:志が同じであること ④唐代：共謀者		思いやること	
2-11 表面	元代:物の外側をなす面	明代・低:数学用語、物体や立体と空間との境界のこと	明治・高：①［同左］、②ものごとの外から見える様子	高:［同左］
2-12 病院	無し	明代・低：患者の治療をするための施設	幕末明治・高：［同左］	高:［同左］
2-13 文学	前秦：古典、古代の規範・制度など	清末・低：literature の訳語	明治・高：［同左］	高:［同左］
2-14 文法	前漢：文書、法令など	明代・低：grammar の訳語	幕末・高：［同左］	高:［同左］
2-15 法学	南北朝：①見習う、②刑法の名称、法治の学	明代・低：西洋の法に関する科学	明治・高：法に関する学問の総称	高:［同左］
2-16 法律	①前秦：刑法、律令 ②元代：修業の戒律 ③明代:文章の創作ルール	明代・低：law の訳語	明治・高：［同左］	高:［同左］
2-17 民族	宋代：家族の団体	清末・低：強い連帯感をもち、同じ文化を共有し、生活様態を一にする人間集団	明治・高：［同左］	高:［同左］

〈使用テキスト〉

與侍郎曹長思書一首:『文選』中冊第四十二巻,中華書局,第 598 頁
金瓶梅詞話：蘭陵笑笑生著・戴鴻森校点,人民文学出版社,1992 年,第 420 頁
醒世恒言:(明) 馮夢竜著,浙江古籍出版社,2015 年,第 6 頁
西學凡：周振鶴主編『明清之際西方伝教士漢籍叢刊』第二輯第 7 卷,鳳凰出版社,第 530 頁

〈参照文献〉

（日本語）

さねとう　けいしゅう 1960.『中国人日本留学史』(1970 年増補版) くろしお出版
広田栄太郎 1969.『近代訳語考』東京堂出版
斎藤毅 1972.「新聞名辞考」『参考書誌研究』
斎藤毅 1977.『明治のことば ： 東から西への架け橋』講談社
佐藤喜代治 1979.『日本の漢語 ： その源流と変遷』角川書店
佐藤亨 1980.『近世語彙の歴史的研究』桜楓社
柳父章 1982.『翻訳語成立事情』岩波書店
佐藤喜代治 1983.『講座日本語の語彙第 9 巻　語誌 I』明治書院
佐藤喜代治 1983.『講座日本語の語彙第 10 巻　語誌 II』明治書院
佐藤喜代治 1983.『講座日本語の語彙第 11 巻　語誌 III』明治書院
高野繁男 1983.「医学用語における語基と基本漢字―『医語類聚』の訳語―」『人文学研究所報』, 神奈川大学人文学研究所
松本宙 1983.「うちゅう（宇宙）　あめのした（天下）　せかい（世界)」『講座日本語の

語彙第 9 巻 語誌 I』佐藤喜代治編，明治書院
惣郷正明・飛田良文 1986.『明治のことば辞典』東京堂出版
中山茂 1998.「近代西洋科学用語の中日貸借対照表」『科学史研究』日本科学史学会編集 第Ⅱ期 第 31 巻
日本国語大辞典第二版編集委員会 2000.『日本国語大辞典』（第二版）小学館
朱京偉 2003.『近代日中新語の創出と交流 ： 人文科学と自然科学の専門語を中心に』 白帝社
杉本つとむ 2005.『語源海』東京書籍
蘇小楠 2005.「日中学術用語交渉の一試論―訳語〈固体・気体・液体〉の由来について」『名古屋大 学国語国文学』96
佐藤亨 2007.『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』明治書院
沈国威 2008.『近代日中語彙交流史―新漢語の生成と受容』（改訂新版）笠間書院
木村秀次 2013.『近代文明と漢語』おうふう
清地ゆき子 2016.「近代訳語「恋愛」の成立とその意味の普及」『東アジア言語接触の研究』関西大学出版社
荒川清秀 2018.『日中漢語の生成と交流・受容―漢語語基の意味と造語力』白帝社
陳力衛 2019.『近代知的翻訳と伝播―漢語を媒介に』三省堂
李瑶 2020.「日本漢字語の中国語に対する文法面での影響--漢字を通じた語彙借用の一側面」『日本漢字學會報』(2)
荒川清秀 2020.『漢語の謎』ちくま新書
陳力衛 2021.「近代訳語のいわゆる転用語について―「文学」と「教育」を例として」『中国語学』(268)
荒川清秀 2021.「日中同形語を歴史的に考える―江戸の蘭学文献を史料に」『中国語学』(268)
（中国語）
鄭奠 1958.「談現代漢語中的『日語詞彙』」『中国語文』第 2 期
劉正埮・高名凱・麦永乾・史有為編 1984.『漢語外来詞詞典』上海辞書出版社
朱京偉 1993.「現代漢語中日語借詞的弁別和整理」『日本学研究』
馬西尼著・黄河清譯 1997.『現代漢語詞匯的形成 ： 十九世紀漢語外來詞研究』漢語大詞典出版社
蒋紹愚・曹広順 2005.『近代漢語語法史研究総述』商務印書館
徐傑舜 2007.「『民族』：一個歴史文化語義学的個案」『語義的文化変遷』武漢大学出版社
周光明 2007.「『新聞』術語之厘定与近代中西日文化互動」『語義的文化変遷』武漢大学出版社
唐宏峰 2007.「当『小説』遭遇 novel 的時候――一種新的現代性文類的産生」『語義的文化変遷』武漢大学出版社
黄河清 2010.『近現代辞源』上海辞書出版社
沈国威 2012.「回顧与前瞻日語借詞的研究」『日語学習与研究』第 3 期
李運博 2018.『近代漢日詞彙交流研究』外語教学与研究出版社
史有為 2019.『新華外来詞辞典』商務印書館
沈国威 2019.『漢語近代二字詞研究：語言接触与漢語的近代演化』華東師範大学出版社
朱京偉 2020.『近代中日詞彙交流的軌跡――清末報紙中的日語借詞』商務印書館

（『雲漢』1 号，2023 年 3 月 26 日）